

優秀賞

無意識な偏見に気づく

埼玉県立伊奈学園中学校 3年

浦野 優彩

私は毎日電車に乗って通学している。電車には様々な人が乗っている。私のように制服を着て参考書を読んでいる人、スーツを着て新聞を読んでいる人などたくさんの人がいる。その中には妊娠している人や障がいを抱えている人もいる。電車は私にとってただの移動手段ではない特別な場所だ。

中学一年生の頃、授業で障がいをもつ人と関わる機会があった。車椅子を使っている人、片麻痺を持つ人、筋ジストロフィーという病気を持つ人。最初はどう関わればいいのかわからなかった。その人の心を私の何気ない言葉で傷つけてしまうのではないかと考えたらず一緒に話すことすらはばかられた。授業で一緒に活動し、話を聞くうちに障がいを持つ人だからといって特別な関わり方をする必要がないとわかった。私は、無意識のうちに障がい者だからという偏見を持っていたのだろう。同じ人間だから、喜ぶことも傷つくことも私たちと同じはずだと思えるようになった。その授業の中で、電車で席を譲ったほうがいいのかどうかという話があった。私は、片麻痺や車椅子、白杖を使う体験などをして、電車で一人で過ごすことは難しいと感じた。また、一人でなくても目的地まで立っていることは難しいと思った。電車に乗る以前に、いつもの生活を送ることさえ難しくなると思った。だから、私は困っている人がいたら席を譲るべきだと考えていた。それが、私にできることだから。でも、その「困っている人」とはどんな人なのだろう。私は新聞で「アンコンシャスバイアス」という言葉があることを知った。「この人は困っている」と決めつけて行動しているのではないか。授業で、席を譲るべきかどうかという考えではなく「席に座りますか。」という気持ちが大事だと教えてもらった。マタニティマークや、障がい者マークを持っているから席を譲らなければいけないと考えることも「アンコンシャスバイアス」なのかもしれない。

私は席を譲ってほしいを伝えられるような環境が必要だと思う。この人は「席を譲った方がいい人」だと決めつけ、行動をすることで無意識のうちにその人の心を傷つけているのかもしれない。席に座れず困っている人に対して気づき、行動することも思いやりだ。でも、席を譲ってほしい人が自ら求められるような社会になれば、無意識のうちに誰かを傷つけてしまうことは減るのではないか。席譲りマークというものがある。直接声を出さなくても意思表示ができ、譲ってほしい人も声をかけられる、お互いが気持ちよく過ごせるためのマークだ。このマークが広く社会に浸透し、配慮を求める人への理解が深まれば、席を譲ってほしい人が自ら求められる社会が実現できると思う。また、「アンコンシャスバイアス」に気づくことで、触れ合った経験がない人と歩み寄ることができる。障がい者という括りをなくすることができる。障がいの有無に関わらず誰もが心地よく過ごせるようになる。だから、まずは無意識な偏見に気づくことから始めませんか。勇気を持って踏み出した一歩が社会の中の誰かの心を救えることを信じている。